

JIRCASのワークショップに参加して

昨年 12 月 13 日に JIRCAS (国際農林水産業研究センター) で当該機関が実施する「西アジア乾燥地域における持続的農業生産の向上に関する調査」の一貫として行われた「西アジア乾燥地域における持続的農業生産のための研究開発」というワークショップに参加する機会を得た。本ワークショップでは JIRCAS 等国内研究機関及び ICARDA 等海外の研究者からの発表が行われた。ワークショップでは 西アジア各国での乾燥地農業研究体制、限られた水資源の有効利用の観点からの土壌水分の測定方法や総合的干魘危機シミュレーションモデルの開発 (DRISiMo) の紹介、耐乾性小麦生殖細胞質のスクリーニング法、乾燥適応作物の根系の機能や形態に関する研究、及び作物生産分野での乾燥地域での研究の動向などが発表された。また、ICARDA の研究者の方から 西アジア及び北アフリカでの Water Harvesting 手法、小麦における耐乾性遺伝特性の改善等の報告があった。さらに、アフガニスタン技術者から内戦で荒廃した同国での研究分野の再構築を目指す活動紹介などもあり、最近の研究動向を把握するうえで非常に有意義なワークショップであった。

我が国際耕種はシリアでの節水灌漑普及計画やアフガニスタンの試験場再建計画等、ワークショップの内容に関連した農業開発業務に参画している。こうした活動を通して、「現地適応技術」、「住民による持続的活動」、「地域資源の利用」などの重要性を強く感じている。これらは最近の開発援助のキーワードにもなっており、現場の人々で使える技術、応用できる技術、そこにある物を生かす技術を導入することで、地域住民に貢献できる「何か」を作り上げていくことの重要性が指摘されている。その意味では、本ワークショップの中で ICARDA が紹介した「Indigenous Water-Harvesting System in West and North Africa」という雑誌には、現場で応用できる多くの水資源活用技術が示されており、非常に有用なものと考えられる。このように、本ワークショップに参加して多くの情報を得たが、一方で研究者には現地で応用できる身近な技術の開発という視点をもっと強く持ってもらいたい、という気持ちを持ったのも事実である。

実際、ワークショップの中での質疑応答でも、研究分野の成果を如何に現地に結びつけるか、また研究者側は常に研究課題とその成果の現場へのフィードバックを考えるという視点を持たなければいけないのではという指摘が出された。応用科学である農学の研究課題は現場の問題を起因として設定されるのが当然であろう。しかし、現実には現場でよく耳にするのは、研究する側が農業現場の多面的な問題をバランスよくくみとっていないのではという意見である。現場でこれは重要だと思われるテーマが、手つかずのまま放置されるケースも指摘されることがある。また、研究分野が細分化されつつある現在の研究体制の中で、営農・栽培や農業普及等の問題を多面的に研究する人材が少なくなりつつあるようにも感じる。

我々コンサルタントは、研究者と現場の両者の意見や情報を入手しやすい場にいる。研究者と現場の中立ちとして、両者の情報交換の「接着剤」としての活動意義は大きい。また、研究と現場の間にあり、等閑視されている問題をすくい上げていくことも重要な役割である。国際耕種は活動の一環として、国内では研修事業、大学での講義や講演、研究機関との交流、海外では開発事業、調査活動、NGO との交流などを行っている。このような立場にある我々は、色々な機会を生かして研究者と現場の意見を相互に伝えていく意義も大きく、これがコンサルタントとしての責務であると感じて日々の業務に携わっていきたい。